

令和 7 年度 大学院修士課程 鍛金専攻実技試験

- 日 時 2 月 13 日(木) 実技試験 11 : 00 ~ 17 : 00
(昼食は 12 : 00 ~ 12 : 45 の間に控室でとること)

○ 問 題

与えられた図面の器をつくりなさい

- ・ 器の縁の処理は、端打ちなど何かしらの処理をすること

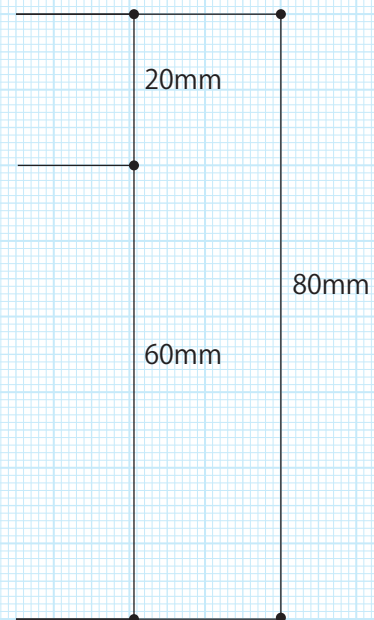
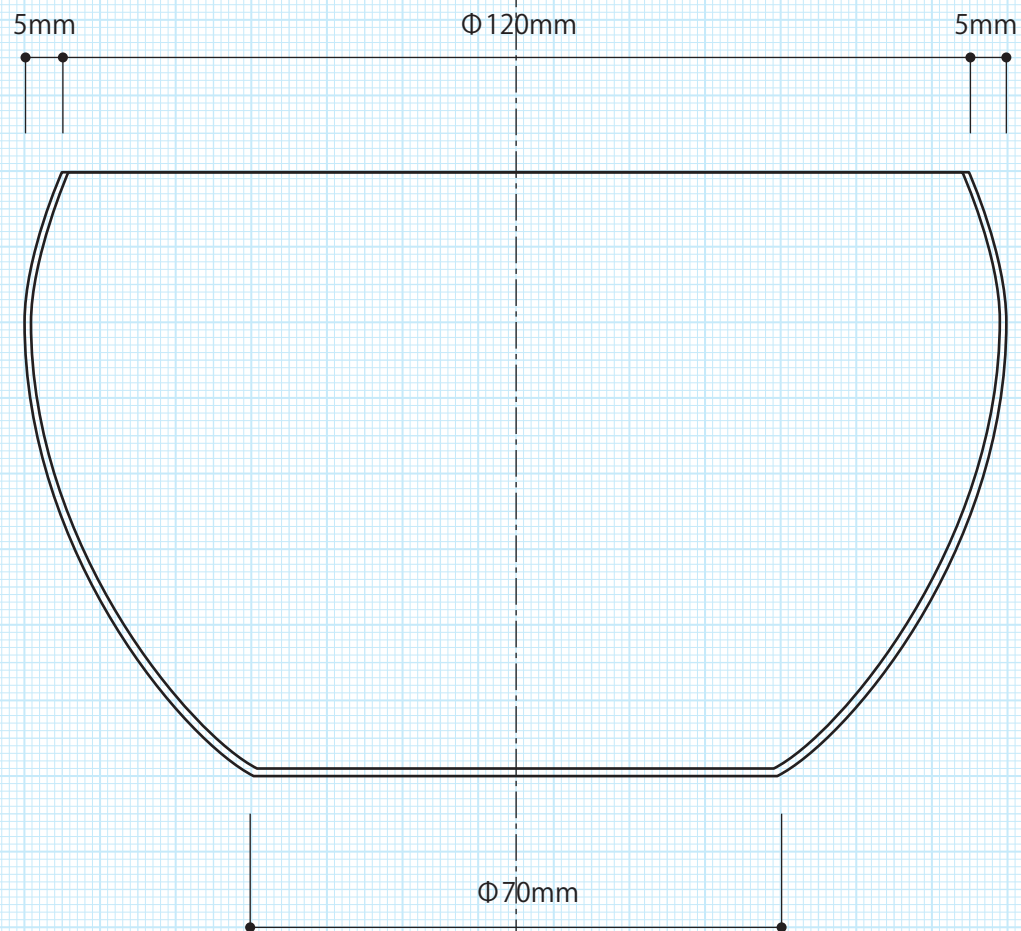
○ 配布物

- ・ 銅板 $\phi 220 \text{ mm}$
- ・ 図面
- ・ 草案用紙 3 枚
- ・ クリアシート
- ・ マジック

※クリアシートはゲージに加工してもよい。

-
-
- 面接試験は 13 : 30 から行います。

受験番号



題目	大学院修士課程 鍛金専攻実技試験
品名	器
素材	銅板 (1.0mm)
年度	令和 7 年度
所属	東京藝術大学 鍛金研究室

令和7年度 大学院修士課程 鍛金専攻筆答試験

解答時間：10：00～11：00

問題 1

あなたが考える鍛金作品の可能性について、800字以内で述べなさい。

原稿用紙 2 枚、草案用紙 2 枚支給

問題 2

銅板 1.0 mm厚で直径 100 mm、高さ 100 mmの器を制作するときの地金の直径を求めなさい。単位はmmとする。

式：

答え:

問題 3

銅煮色着色の手順を説明しなさい。

問題4

下記の文章で、合っているものには「○」間違っているものには「×」を（ ）に記入しなさい。

- ・銅製作品を硫酸銅と緑青を入れた水溶液で煮る着色を硫化着色という（ ）
- ・鍛金で主に使用する真鍮は、銅を3に対して亜鉛を7の比率の合金である（ ）
- ・ガス溶接の吹管は、A形溶接器と呼ばれるイタリア式とB形溶接器と呼ばれるフランス式がある（ ）
- ・銀鑑（五分鑑）の融点は800℃で、成分比は銀10に対して真鍮5である（ ）
- ・赤銅（烏銅）は、銅と真鍮の合金である（ ）
- ・四分一（朧銀）は、銅と銀の合金である（ ）
- ・100円白銅貨などに使われる白銅は、主に銅とニッケルの合金である（ ）
- ・日本刀の制作に用いられる練鋼は、玉鋼とよばれる（ ）
- ・18-8ステンレス鋼は、鉄にクロムを18%、ニッケルを8%加えた鋼材である（ ）
- ・TIG溶接機で銅板を溶接するときは、交流に設定するとよい（ ）
- ・ヘラ絞り（スピニング）加工とは、型と金属板を回転させ、ヘラ等の絞り工具を用いて、金属板をしごきながら型に密着させて成形するもので、製品の形態は、回転体となる。（ ）
- ・煮色着色で銅の表面に形成される皮膜は、亜酸化銅である（ ）
- ・銅を硫化着色した場合、その表面には酸化銅の被膜が形成される（ ）
- ・金切りばさみで曲線を切るときは、直刃を用いると良い（ ）
- ・日本工業規格においてS50Cとは、炭素を約5%含む鋼材である（ ）
- ・一般的に金属加工で使われるドリルの先端切刃角は、118度である（ ）
- ・ストレートシャンクドリルは通常、直径が10mm以下である（ ）
- ・雌ネジ加工においてM7のタップを使ってネジを切る場合、下穴を6.8mmで穴をあける（ ）
- ・彫鍛金で使用されるヤニの主成分は、松ヤニと地の粉と菜種油である（ ）
- ・半田の主な成分は銀と鉛である（ ）

問題5

当金（ぶっ立て）の制作手順を図と文章を用いて説明しなさい。